

国際シンポジウム一一

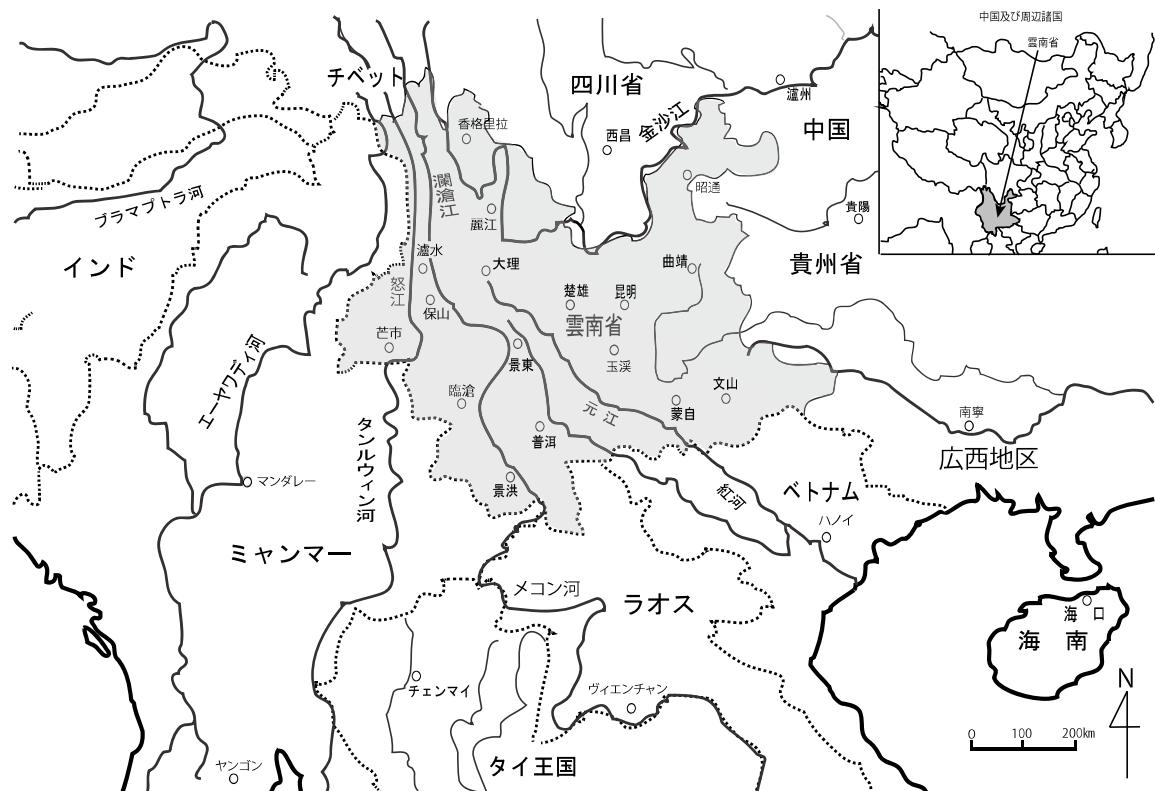
雲南省大理白族の他界觀——大本曲『黃氏女対金剛經』を中心に——

立石 謙次

はじめに

雲南省大理白族の他界觀

中国の少数民族の一つ、白族（ペー族）は中国の西南端に位置する雲南省の西部に多く居住する。現在の人口は約一九五万人（二〇一〇年）、そのうち約一二〇万人が大理地方に集住している。本稿では、雲南省大理白族の宗教と民間芸能の一つである「大本曲」の内容に注目し、彼らの他界觀、特に冥界を中心とした世界についてみていくことにしよう。なお本稿で引用する大本曲テキスト『黃氏女対金剛經』（以下『黃氏女』とも略称する）は、特に説明がない場合、二〇一七年に立石謙次・吉田章人が出版する『大本曲『黃氏女対金剛經』の研究——雲南大理白族の白文の分析——』からの引用である（原本は大理州喜洲鎮の大本曲芸人王祥氏所蔵の曲本）。また引用文中の白族語の発音は、現行の新白文（ローマ字白文）によつて表記する「楊應新等 一九九五」「王鋒 二〇一四」。新白文と国際音声表記（IPA）との対応表は、文末に示す。なお大本曲は、主に白族の南部方言地域で行われている芸能である。特に説明しない限り、白族とは南部方言地域の白族を、白語とは白語南部方言のことを指す。



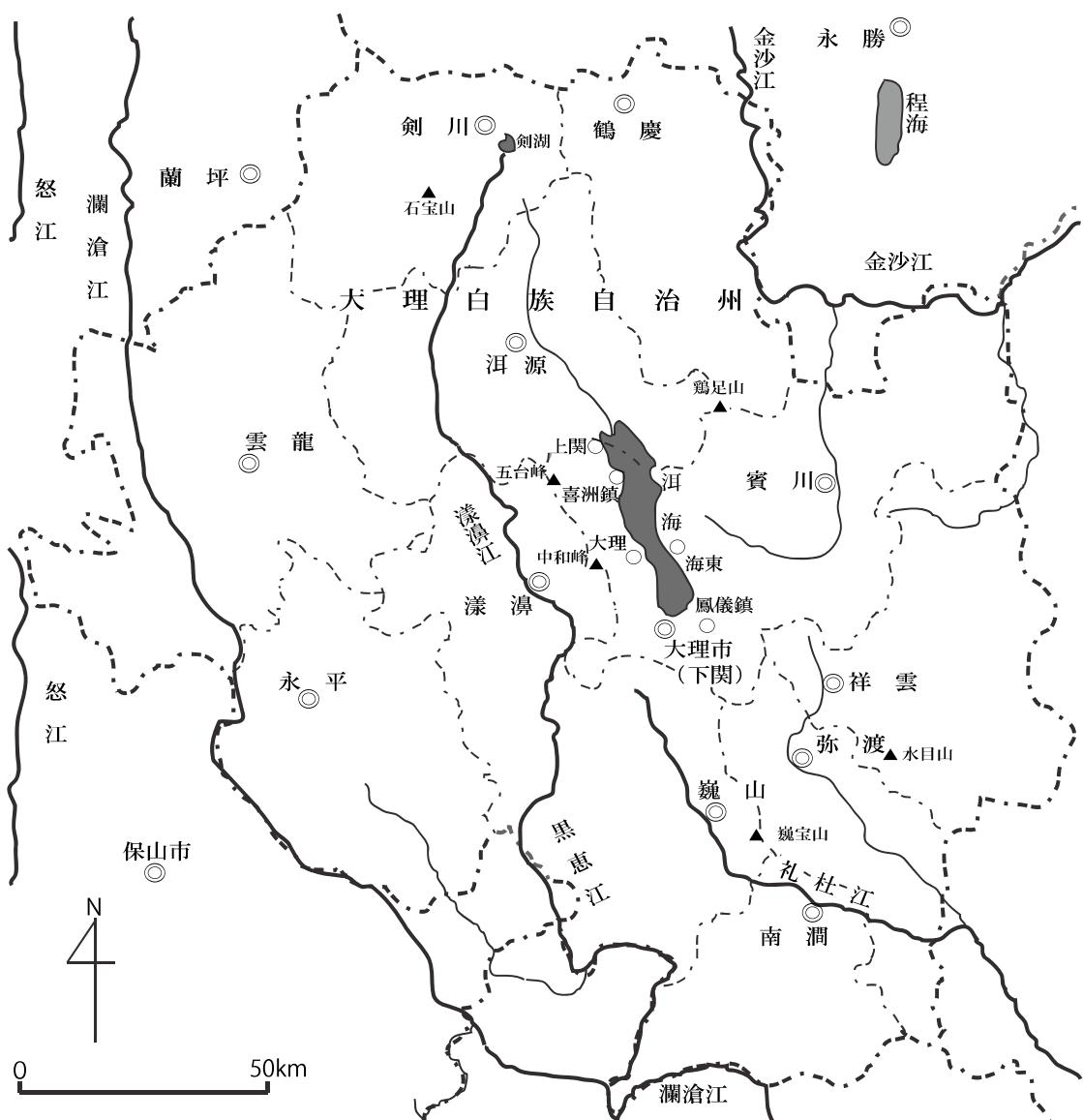
地図1 雲南省地図

白族は独自の言語である白語（ペー語）を保持している。農村においては、なお白語が彼らの主要な言葉となっている。現在白語はチベット・ビルマ語派に属す言語と考えられているものの、漢語の影響を大きく受けており、正式にはどの語派・グループに属するかは未定となっている〔王鋒二〇一四・四一五〕。

伝統的な生活習慣も周辺の漢族と大きな違いはみられない。一九八〇年代から大理地方を調査した横山廣子は、白族が漢族と自分たちとを区別する場合、「その人間が何語を話すかということによって象徴的に表現された」とし、「旧社会での漢族と白族との境界は微妙なものであった」と指摘する〔横山一九八七・四六〕。また白族居住地では、イスラーム教徒である回族とも混住しており、横山は、回族とほかの民族とを隔てる差異は、儀礼や宗教に関する風俗習慣に現れるとも考える〔横山

一 大理白族と宗教

雲南省大理白族の他界觀



地図2 大理州地図

一九八七・四九）。そして横山は、白族・漢族・回族との関係について、「回族とその他の集団との境界は、漢族と白族との境界より明確に引かれている。漢族と白族との間の境界は、各方面で非常に流动性を持つている」と結論する「横山一九八七・五一」。

大理地方の白族（ペー族）には、「本主」と呼ばれる独自の信仰が存在している。本主は、それぞれの村落で独自の神が祀られる。神として祀られているものとしては、歴史上の英雄（外来の征服者なども含まれる）、伝説上の白族の先祖、自然物、仏教・道教の仏・菩薩や神々などがあげ

られる。たとえば、横山は「本主を含めて白族の宗教には漢族から吸収したと思われる部分がきわめて大きい。しかしそれにも関わらず、彼らは本主を中心とする一つの小宇宙を形成し、その独自性を保っている。その小宇宙は、漢族が主体となる、さらに高次の宇宙（玉皇を頂点とする中国の神々の序列—引用者）を模倣し、また現実の社会においてはそこからの直接的支配を受ける。しかし彼らの宗教が描く本主が支配している」と、本主信仰の特徴とそこからかいまみえる白族の独自性について説いている〔横山一九九一・四一四〕。横山の指摘通り、本主の信仰自体は彼らの歴史観・自然観・宗教的世界觀を示しているものの、他界、特に冥界との関連は薄い。

川野明正は、白族社会で信じられている憑き物である「ピヨ」について考察をしている〔川野二〇〇五a・一一九一五二〕。超自然的存在である「ピヨ」ではあるものの、川野の分析をみる限り、やはり白族の冥界に対する世界觀との直接的関連は薄いと考えられる。さらに川野は、雲南省にひろく流布している神像呪符である「甲馬子」についての考察をおこなっている。川野は甲馬子の考察をするうえで、「そこには「中国の民間信仰文化」と「雲南地方文化」、あるいは「漢族文化」と「少数民族文化」などの言葉の上で、単純に線引きできないような錯綜した状況がある」ことを指摘している〔川野二〇〇五b・一一〕。また現在知られている白族の神話・伝説などをみても、明確に白族独自の他界觀を示す内容のものはない〔雲南省民間文学集成弁公室一九八六〕。白族の本主信仰以外の宗教には、通常の仏教・道教などのほかに、大理州北部の劍川県を中心としてアジャリ（阿叱力）と呼ばれる在家の宗教職能者が存在している。彼らは葬儀・法事などの際に儀礼を行い、死者を弔う。アジャリはこれまで八世紀後半から十三世紀後半にかけて、雲南に展開した南詔国・大理国以来の仏教（密教）と関連付けられてきた〔張錫祿一九九九〕〔李東紅二〇〇〇〕。ただしアジャリが用いる宗教書は、明代（一三六八—一六四四）

頃の中国で盛んに用いられた「科儀」と呼ばれる、主に儀式次第を記したものである「侯冲一〇〇八」。つまり白族のアジャリが行う死者を弔うための儀式は、少なくとも明代ごろに中国からもたらされた知識である。アジャリは中国の伝統的宗教が地方（少数民族地域）において、残存したものであると考えられる。これら科儀を用いた宗教儀礼は、近年まで中国ではすでに滅んだものと研究者の間では考えられてきた。

以上のように白族の特に冥界を中心とした世界觀を支えているのは、少なくとも表面上は、中国由来の宗教（漢伝佛教・道教）より大きな影響を受けている。ただし川野も指摘するように、白族社会に受容された中国的宗教知識は、換骨奪胎され白族的世界觀の枠組みの中でとらえている（「自己化」している）可能性は否定できない「川野一〇〇五b・二一」。白族における中国的宗教信仰の自己化の問題については、今後の課題となろう。



写真1 剑川のアジャリ張宗儀氏による法会（2010年3月15日、著者撮影）

二 白族と大本曲

二一 大本曲

白族の他界觀は、彼らの民間芸能の中にもよくあらわれる。

大理地方には、「大本曲」と呼ばれる、いわゆる「説唱」（かたりもの）という民間芸能のジャンルが伝わっている（「説唱」については「澤田 一九八六」を参照）。大本曲は、歌い手と三絃（三味線）の二人で物語を歌う。その伝統的な演目のほとんどが、中国の語り物や劇で知られたものばかりである。

彼らはこれら演目を、漢語と白語とを併用して歌っていく〔大理白族自治州文化局編 二〇〇三〕「董団秀 二〇一二」。伝統的な大本曲の演目の八割近くが中国の演劇などから題材をとる「大理白族自治州文化局編 二〇〇三・三二一三八」。二〇〇三年までの段階で現存の曲本は八二本、演目のみが伝わっているものが六六本、確認されている。大本曲の演目と解題については「董秀団 二〇一二・四一一四三六」が参照できる。現存する最も古い曲本は、清・光緒年間（一八七五—



写真2 「王祥氏・段耀才による大本曲の上演」（2014年8月16日、著者撮影）

一九〇八）の写本であり、これ以前の大本曲の実在は確認できない「大理白族自治州文化局編 一〇〇三・一〇」。大曲で歌われる歌詞は最初の三行が七文字、最後の一行のみが五文字によって一段が構成される「三七一五」の様式をとっている。後述するように、これは明代の白文碑にすでに備わっている様式である「周祐 二〇〇一・一〇九一一三」。さらに白語と漢語とを併用するという白族の先祖による芸能については、乾隆元年（一七三六）の序のある鈔本で程近仁修『趙州志』卷四「雜記」に以下のような記述がみられる。

民家の曲。民家の言葉でおこなわれる。声の調べは単調でなく、音の調子はゆつたりとして人を感動させる。

また演じて芝居をすれば「民家語に」漢語を混ぜたりもする。これを「漢僰楚江秋」という⁽¹⁾。

少なくとも十八世紀前半には大理盆地南部の趙州（今の大市南部から祥雲県・彌渡県にかけての地域）に民家語（白語）でおこなう曲（かたりもの）が存在していたことがわかる。これが白・漢併用のかたりものであつたかは記されていないものの、白語と漢語とを織り交ぜて演ずる芝居も存在していたとみられる。

二二二 白文

現在、白文（ペー文）と呼ばれるものには、二種類ある。一つは、漢字を用いて白語を表記する方法である。これは「老白文」「方塊白文」「古白文」とも呼ばれる。もう一つはローマ字による白語の表記方法がある。これは「新白文」とも呼ばれる「楊應新等 一九九五」。本稿で問題とする白文とは、前者の「老白文」のことを指す。これまでの研究では、

白文の源流は八世紀後半から十三世紀後半の南詔国・大理国時代には作られたと考えられる。たとえば宋・李昉撰『太平廣記』卷四八七「蠻夷四・南詔」には、『玉溪編事』を引いて南詔国の清平官（宰相）である趙叔達の詩が載せられている。

法駕避星回

法駕^{こうでい}は星回^{たいまつ}の明かりを避け

波羅毘勇猜

波羅^{トラ}や毘勇^{ウマ}さえも彼が誰なのかを猜^{うなが}つた

河濶氷難合

河は広く氷が張ることもむずかしい

地暖梅先開

大地も暖かくなり、もう梅の花がほころんだ

下令俚柔洽

皇帝は俚柔^{たみ}が仲むつまじくたれと命ぜられ

獻琛弄棟來

人びとは珍しい宝を献じて弄棟^{ろうとう}（今の姚安県）より赴いた

願將不才質

願わくは、この不才をもつて

千載侍遊台

永くこの遊台にて皇帝のそば近くに侍つて いたいものだ

同詩には漢語では解釈できない語句が含まれている。まず「星回」について、この語は南詔国語の「たいまつ」に相当する語彙を、漢字によつて表記している。ちなみに、たいまつのことを現代白語でも「xif huit」と発音する。

また『太平廣記』の同詩に対する注には「波羅は虎なり。毘勇は馬なり。驃信は昔、ここに行幸し、野馬や虎を射たことがある⁽²⁾、「俚柔は百姓なり⁽³⁾」とある。さらに上述の注にみられる「驃信」は南詔国・大理国で用いられた君主の

自称である。『新唐書』卷二二二中「南詔下」によれば、南詔国七代の尋閣勸（在位八〇八—八〇九）が唐の元和三年（八〇八）に即位すると驃信と自称したという⁽⁴⁾。これも自國語の語彙を漢字によつて記す例である。

また南詔国末期の八九九年に原本がつくられた『南詔図伝』という画卷がある。この史料は観音の予言による南詔国の建国をテーマに作られたもので、图像卷と文字卷の一巻よりなる〔立石 二〇〇三〕〔北澤 二〇一一〕。その图像卷には、「李忙靈は（観音の出現に）驚いて銚鼓を打つて村人を集めた」、という記述がある〔北澤 二〇一一・一二四〕。この記述に対応する画像を確認すると、李忙靈が打ち鳴らしているのが「銚鼓」であることわかる。これに関連して現代白語では「銚」のことを「gerx」と発音する。現代白語と当時の南詔国語との関連はいまだ不明な部分があるので、おそらく「銚」という文字は、南詔国当時の自民族語の銅に相当する語彙に對し、漢字の形声の方法を用いて新たに創られた文字であると考えられる。



写真3 大理市博物館蔵「詞記山花咏蒼洱境」碑（2014年8月20日、著者撮影）

このように南詔国・大理国当時の「白文」の原型と考えられているものは、漢字を用いて自民族語の語彙を表記したり（日本語の音仮名に近い用法）、漢字の「形声」の方法を用いて新たな文字を創作したり（日本語の国字に近い用法）して、これら単語を漢語（漢文）の中に挿入するだけのものであったと考えられる。

現代の白文のように白語の「文章」を、漢字を用いて表記するということとは質的に異なる。文章としての白文が登場するのは史料上明代になつてからのことである。大理州喜洲鎮にある聖元寺に「詞記山花咏蒼洱境」（通称「山花碑」）という白文詩の石碑が刻まれた。「山花碑」は、明・景泰元年（一四五〇）に立てられた「聖元西山記」の裏面に刻まれている。このため正確に同碑が刻まれた年代まではわからないものの、「山花碑」も明代碑と考えられており、「雲南省少数民族古籍整理出版規劃弁公室 一九八八・四」。この碑文は完全な漢文ではなく、一部分は白語のみによつて解釈しうる。同碑は「三七一五」の形式をとり、大本曲のものと一致する「段伶 一九九八・二八一三一」。また「山花一韻」と呼ばれる碑文は、明・成化十七年（一四八一）に立てられた「処士楊公同室李氏寿藏」の裏側に刻まれている。「山花一韻」碑も、「三七一五」の様式を備えている「周祐 二〇〇二・一〇九一一四」。

三 大本曲『黄氏女対金剛經』

大本曲の演目のなかに、いわゆる「地獄めぐり」というジャンルがある。本稿で問題とする『黄氏女』も、このジャンルの中でも比較的人気のある演目の一つである。ここでは『黄氏女』の内容の中から、白族の冥界を中心とする宗教的世界觀を考察していこう。

三一 『黄氏女』について

上述のように、『黄氏女』は白族の間でも比較的有名な物語である。しかし、『黄氏女』は白族オリジナルの物語ではない。同演目は、中国民間演劇でも『黄氏女遊陰』などの演目で知られている。はやくは明代の『金瓶梅詞話』第七十四回「宋御史索求八仙鼎 吳月娘聽黃氏卷」には、「黄氏女卷」という中国の民間宗教で用いられる「宝卷」が読み上げられる場面がある。「陶慕寧

校注二〇〇〇・九八二」「小野忍・千田九一訳一九六九・一一九一一二四】。「黄氏卷」とは、早くは澤田瑞穂が指摘するように『仏説黄氏女看經宝卷』『三世修行黄氏宝卷』、あるいは単に『黄氏宝卷』などとよばれる宝卷である。【澤田一九六三・一四二一一四三】「澤田校注一九七一・一〇六」。『金瓶梅詞話』第七十四回の一節の内容には、明らかに現存の『三世修行黄氏宝卷』などの宝卷^⑥や大本曲『黄氏女』の内容と一致する部分がある。このため『黄氏女』の物語は、少なくとも明代には中国で知られていた物語が白族の間に伝わつたものと考えられる。

『黄氏女』の内容は以下のとおりである。趙連芳の妻である黄桂香（黄氏女）は篤く仏教を信奉し吃齋して「金剛經」を読むなど善い行いを続けていた。これが閻羅王の知るところとなり、黄氏は接引童子に導かれながら地獄を巡り、

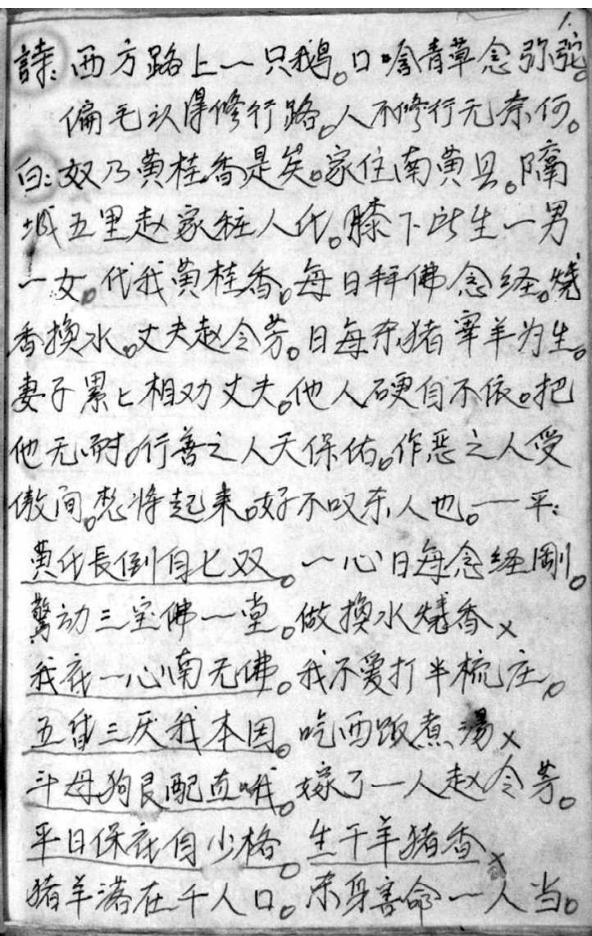


写真4 王祥氏所蔵、
大本曲『黄氏女對金剛經』曲本

因果應報を目の当たりにする。黃桂香が閻羅王に「金剛經」を読む」とで信仰心を試されていた時、黃桂香が死んでしまったと勘違いした趙連芳は、妻の体を火葬してしまった。閻羅王は、黃桂香が「金剛經」を一字も違わず念じ終えぬく、彼女を男性として生まれ変わらせ、富貴を得しめたといふ物語である。

しかし大本曲は中国の演目をそのまま受け入れてゐるわけではなく、白族社会独自の生活状況が反映されてゐる記述も見られる。たとえば、黃氏の娘である趙金剛が、黃氏を弔う記述がある。そこには以下のように記される。なお引用文中の傍線は、白文であることを示す（以下同じ）。

金剛氣哦母買水。

jie ga til ngel moux merz xux

私、金剛は母のために「買水」に行く

次吐彼坑反比山。

cil nao bez he fer bit sei

身に裏返した蓑を羽織り

手提坑咽之皮。

sex mel til he juif zi beit

手には小さな陶器の壺

栽拿錢旺文。

zei nei ceil wal bei

手には小ئな錢を幾文か握る

我自點坑香旺桿。

nagot zil geit he xiouf wal gaf

私は線香何本かに火をつけ

阿聲哭期倒門咀。

家の門で声をあげて泣いた

at cerl kao qid meid juix

金剛我去買水具。

jie ga ngaot ngerd merz xux juif

私、金剛は水を一壺買ひておます

司鱗蛾母死。

kaot nieip ngel moux xix

哀れむぐわは、お母様の死よ

阿聲哭呴江邊吐。

at cerl kao pia gvf bieif nao

川のほとりで一たび泣いた

樹溝跪下恨等偉。

sul gou gyvz tel hel det weix

膝を折りてついに跪く

三夫江神利可神。

saz fu jia sep lil houp sep

川の神と水溝の神に申し上げ

紙下錢旺文。

liou tel ceil wal bei

錢を幾文か投げた

香央點下江邊吐。

川辺で線香に火をつけて

我自反咬阿具水。

ngaot zil fer gef at juif xuix

私は川に背を向けて一壺の水をすくつた

我干水具咬坑咽。

ngaot ga xuix juif gef ke yef

私は一壺の水を掬い上げると

白阿聲哭口。

泣き声を一つ上げた

zil at cerl kao ni

我自哭打箇頭可。

ngaot zil kao daz gef ded kaoz

恤尾々可耳刷水。

yeit ngv zi kaot hherx suaf xuix

私は泣きながら、川から帰ると
軒下でその水を沸かした

我干水具刷期咽。

ngaot ga xuix juf suaf qi yef

洗峨母咀偉。

seix ngel moux juix weix

峨母已經洗完。

ngel moux yi jie seit wof laoz

開咀我咗昨阿爹。

kel juix ngaot hhef zaop at dix

利干峨母五坑咽。

nil ga ngel moux vud ke yef

穿峨母衣服。

yiz ngel moux yif beiz

峨母殺答求恨了。

negl moux saf daf qiuol hel laoz

私は壺の水を沸かすと
私は壺の水を沸かすと

お母様の顔を拭いてあげた

母を拭いてあげると

口を開いてお父様を呼ぶ

お母様を支えてへださる

お母様に服を着せてあげましょば

お母様の支度が終わると

我自跪下恨等偉。

ngaot zil gvt tel hel det weix

私はいりに跪き

金剛我干峨母拜。

jie ga ngaot ga ngel moux berz

私、金剛はお母様を拝みます

昨阿爹。

zaop at dix

お父様を呼ぶ

干峨母裝棺。

ga ngel moux zua gui

お母様を御棺に収めましょ、

いには死者のために「買水」を行い、川の神・水溝の神から水を汲む場面が描かれている。買水自体は中国の伝統的な習慣である。現代の大理においても、喪主は蓑を裏返しにして、大理盆地の東側にある洱海じかいに水を汲みに行く習俗が残されている〔立石一〇一四：八〇一八一〕。この記述は大本曲テキストの表現に過ぎないものの、実際の白族が死者を葬り、死者を扱う過程をある程度反映している。

II—II 『黃氏女』における冥界の記述

上述のように『黃氏女』の主な内容の一つは、主人公の黃桂香が冥界の閻羅王に召され、地獄をめぐり、その後、男性に生まれ変わるといつものである。この地獄めぐりの記述が、どのような宗教的世界觀から成り立っているかを、以下の表から確認してこゝへ。

		地獄巡りの旅程	
城隍廟	白い道と青い道	寺	牌票を受け取る。
町	閻門（鬼門）	界牌官	善悪と富貴とが分けられる。
棋盤山	棋盤山	将棋盤の形をした山の上で亡者が戦わせられる。	
破錢山	破錢山	現世で焼かれた、ぼろぼろの紙銭が積み上げられて捨てられる。	
汪學太（望鄉臺）	汪學太（望鄉臺）	陽間（現世）を望むことができる。「汪學太」は白文。	
火爐山	火爐山	暑さのために亡者の喉が渴く。	
孟婆	孟婆	迷魂湯を売り、亡者の記憶を失わせる。	
冷風山	冷風山	悪業を行つた人間を骨灰とする。	
鋼蛇山	鋼蛇山	大蛇が過ちを犯した人に咬みつく。	
鉄狗山	鉄狗山	犬が過ちを犯した人に咬みつく。	
掛刀山・剣樹山	掛刀山・剣樹山	刀の山が体に引っかかり、骨肉をバラバラにする。	
背陰山	背陰山	日や月さえも遮る大きな山。	
三本の道	三本の道	後ろの三本の橋と同じものか。	
西の道	西の道	極楽への道。	
真ん中の道	真ん中の道	五殿への道。	
三つの橋	三つの橋	金の橋、極楽へ行く人が渡る。	
上品橋	上品橋	地獄へ行く人が渡る。	
下品橋	下品橋	五殿への橋。	
銀橋	銀橋		

頭殿	晩死城（枉死城）	冤罪で死んだ者が集められる。生まれ変わることができない。
二殿		楚江王が掌る。
三殿		秦広大王が掌る。
四殿		宋地王（宋帝王）が掌る。
五殿		五官大王が掌る。
五方地獄	血紅池（血湖池）	閻羅王が掌る。
東方雷轟獄		子を出産した女性が三年の苦しみを受ける。黄桂香に恩を受けて死んだ猫（猫將軍）が掌る。
南邊火塵獄		
西方寒冰獄		
中央鋸解獄		
十八層地獄		
偷雞獄		
轉輪臺		
五本の道	北方の地獄の記載なし。	
青い道		
白い道		
黒い道		
赤い道		
最後の道		
陽間	牛馬に生まれ変わる道。 鶏・鶯鳥・鴨など鳥に生まれ変わる道。 虫や蟻に生まれ変わる道。 農家の人に生まれ変わる道。 官僚に生まれ変わる道。	陽間へ生まれ変わるための場所。 偷雞獄以外の記載なし。
黃桂香	が張員外の家に生まれ変わる。	

黄桂香は閻羅王より派遣された接引童子の案内のと、まず、都市の守護神である城隍の廟に赴き、牌票を受け取つて冥府へ入つていく。黄桂香は人間界（陽間）から冥界（陰間）と入り、その様子を目の当たりにする。川野によれば、大理地方民間には、冥界や神界に通ずる能力を持ち、死者の魂を呼び寄せる口寄せ儀礼をおこなう巫女・巫師が存在している。そこでは人間が生活する世界を「陽間」・死者の世界を「陰間」と区別しているという。さらに口寄せの巫女は、神像呪符のうち「接引童子」の札を焼き、呼び出すべき死者の魂を冥界に行つて探し出し、この世まで連れてくれるという〔川野一〇〇五b・八四〕。『黄氏女』の場合、陽間から陰間に呼び出されるため、過程としては逆になるものの、『黄氏女』中の「接引童子」と大理民間のそれとは、ある程度関連があるかもしれない。黄氏は城隍廟にて、牌票を受け取り陰間へ入る。陰間に入ると2本の道があり、童子に導かれ五殿へ通じる道を歩く。これについては『黄氏女』以下のように記される。

渺渺是三回。

miaot miaot sil sa huip

悠悠是七魄。

you you sil qif berf

渺渺たるはこれ三魂
悠悠たるはこれ七魄

不覺杯咲鬼門關。

buf jiaof bei pia gvx meid guerf

あゝといふ間に鬼門關へ到着

城隍廟孟領牌票。

cel huaf miaoz mel nerz peip piao

城隍廟にて牌票を受け取り

交入界牌國。

jiao ssup gail paip guerf

頭_{トトロ}阿燈土狗朱。

ded mel ax de tux goux zu

界牌官へ渡して入る
前に道が一本見える

匣朱那白阿朱青。

at zu na berp at zux qierl

一本は白く、もう一本は青い道

本認怎拉朱吐杯。

bet sse zef na zu nao bei

童子説明白。

tvp zit suof miep berf

童子よ、説明してくだれ。

頭_{トトロ}阿燈那等帶。

ded mel ax de seif det seif

前にはお寺が一つ、見える

男紅女綠好鬧熱。

nap houp niuit luf haot naol ssef

着飾った男女でとても賑やか

黃泉路上無老少。

huap queip lul sal wup laot saol

黄泉への道は若いも若くも

怎詰休艮格。

zex jil xioux nid gerf

どれほどの人がいるのだろう

頭_{トトロ}阿燈城匣城。

ded mel ax de zerd at zerd

前には町が一つ、見える

拉栽過燈國阿國。

la*z* ze*i* guo*z* de guerf at guerf

խունի 関門を 一つ過れば

等偉坐燈鄧狗良。

det weix gvz de del goux nid

ハハニ一人の人が座っていた

糾我格燈格。

jiao ngaot gerf de gerf

私はおぞけ立つ

この後、黄桂香は閻魔王府にたどり着くまでに様々な地獄や、現世を眺めることができる望郷台を目の当たりにする。そして黄桂香たちは前世の記憶を失わせる迷魂湯を亡者に飲ませる、孟婆に出会う。冥界に招かれて黄桂香の目の前には三つの橋（道）が姿を現す。この橋の一つは、ただちに極楽へ赴くもの、真ん中の橋は閻魔王府への道、最後の一つは地獄の責め苦を受けねばならぬる道である。この三つの橋について『黄氏女』においては以下のようにな記される。

說與善人聽細端。

suof yuit sail ssep tie xil dua

善人に詳しく述べます

三條大路在面前。

sa tiaop dal lul zail mieil qieip

三つの道が前にハレコます

由限金橋頭止過。

youf hel jieif gut ded nao guoz

金の橋の上を渡れば

雲南省大理白族の他界觀

自条上西天。

zil tiaop sal xi tiei

西方阿朱吉樂國。

seif baot at zu jif louf guerf

亮由銀橋頭吐杯。

nial youp nid gut ded nao bei

利塘問坑下品橋。

nil dad bier ke xial piet qiaop

作惡良伙杯。

zuof wouf nid huo bei

西天へ上の道にハガルまぢ
西には極楽への道

我らは銀の橋の上を渡りましょハ

下品の橋のいとを問われるなハ

これは悪人が渡るもの

ハハした冥界に関する記述は、単に『黃氏女』の創作といつわけではなく、実際の白族の他界觀に基づいている可能性がある。一九四〇年代に大理地方を調査したフランシス・ルーカー（Francis L. K. HSU）は大理地方の宗教職能者と所有する経典（*A Precious Bell for Awakening the Ignorant*）についての聞き取りによって、大理地方の人々が考える冥界について以下のよう記してゐる〔HSU 1971：137〕。

境界は陰間より陽間の間に引かれてゐる。この境界は、人が生と死とを理解するかのように区別されている。この境界を越えてみるとすぐに、一本の主要な道がある。一本は極楽や高次の靈的世界に続いている広い大きな道路である。もう一本は、低次の靈的世界に通じている狭い小道である。

魂が狭い小道に入るとすぐに、三叉路へ行きつく。そこには陽間の街並みのようにお店や宿屋、食堂が並んでいる。

少し行くと鬼門関がある。この関所は実際にはそれ自体が城となつており、城壁にある正門のようである。そこには新たに亡くなつたものやさまよつている亡者たちが登記を行う役所や、貴賓のための接見室が備えられている。この関所は鬼卒によつて守られている。中には多くの役人としての城隍がいる。

『黄氏女』とシューの記述とを比較すると、ともに死後、人間世界と冥界とを分ける境界を越えると二本の道に行きあたることが記されている。さらに『黄氏女』では三つの橋、シューの記述では三叉路に行き当たるとしている。また順序が異なるものの、ともに道沿いに町が存在したり、境界では城隍が魂の往来を掌つてたりする点で共通している。このように『黄氏女』の記述は、実際の白族の他界觀と一定程度、関連があるとみなすことができる。

さらに『黄氏女』の記述を確認していくと、冤罪で死んだ者が入れられる枉死城などの記述もみられる。黄氏女は、五殿を掌る閻羅王に出会うまでに、頭殿から四殿までを掌る冥界の王たちの世界をめぐる。この頭殿から五殿までの冥界の王については、『閻王經』にみえる、十王の一殿から五殿までの記載と一致する。ただし閻王以降の王についての記述は省かれている。

これら冥界の記述は、基本的に中国の民間信仰の他界觀と大きな違いは見られない。また黄氏女は、男に生まれ変わること前に、血の池地獄の責めを受けさせられそうになる。これは黄氏女が子供を産んだことのある女性だという理由からであるが、これもやはり中国における「血盆經」信仰に基づくものだと考えられる〔前川二〇〇三〕。ただし

『黃氏女』テキスト後半の五方地獄のうち北方の地獄の記述はなく、また最後の十八層の地獄についても「倫鶴獄」以外の記述もない。これが本稿で問題とした、王祥氏所蔵のテキストの問題なのか、大本曲『黃氏女』の演目全体の問題なのかは、今後の課題となろう。

三一三 『黃氏女』にみられる仏・菩薩および神祇について

次にこの物語に登場する仏・菩薩および神祇などの名称より、大理白族の宗教的世界觀を確認していこう。なおテキスト中の神祇などの名称については、誤字・当て字が多く含まれる。その場合は（）に規範の漢語による名称を示す。

『黃氏女』中にみられる仏・菩薩・神祇の名称								
番号	神祇の名称。（）内は規範の漢語による名称	登場場所（無記載は、登場人物の会話中などに登場するもの。）	備考					
1	彌陀・阿彌陀							
2	盤古							
3	竈神							
4	山神							
5	城皇（城隍）							
6	妙善女							
7	韓香（韓湘子）							
8	天地水（天官地官水官）							
9	安土地龍王	不明。						

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10
閻羅王	五官大王	宋地王（宋帝王）	鬼王	楚江王	秦広大王	六卒鬼王	孟婆古夜（孟婆）	馬面將軍	牛頭將軍	獄卒鬼王	界牌官	接引童子	記垢・門神	順風耳	千里也（千里眼）	太白星李長根（李長庚）	富羅伯（傅羅伯）	桂枝羅漢	唐王	關音菩薩（觀音菩薩）
冥界	冥界	冥界	冥界	冥界	冥界	冥界	冥界	冥界	冥界	冥界	冥界	冥界	冥界	冥界	冥界	冥界	冥界	冥界	冥界	「唐王游陰」の主人公。唐、太宗李世民。
五殿をつかさどる。黄桂香を陽界から召す。	四殿をつかさどる。	三殿をつかさどる。	二殿をつかさどる。	頭殿をつかさどる。	死者に迷魂湯を飲ませ、現世の記憶を失わせる。	「古夜」は白語（老女の意）。													「白蛇伝」の登場人物。	「傅羅伯尋母」の主人公。

以上のように、『黃氏女』に登場する仏・菩薩そして神祇のほとんどは、中国の仏教・道教や民間信仰、または中国の演劇などの登場人物である「馬書田 一九九四・一九九六・一九九七・一九九八」。たとえば大理市の喜洲鎮にある「十隍廟」は、喜洲鎮の本主である「施主景帝」の廟ではあるが「大理白族自治州文化局 二〇〇三・二四」、同廟内には閻羅王などの十王や城隍・地藏菩薩、さらに地獄の母を救うために地獄を巡る物語である「傅羅伯尋母」の主人公の傅羅伯が祀られている「楊育新二〇〇〇・一八九一・一九〇」。このため、これら神祇は実際の白族民間でも信仰されているものであることが分かる。

さらに『黃氏女』の中では、黃桂香が「金剛經」を読み上げる部分が三度ある。ここで黃桂香は、多くの仏・菩薩や神祇の名を唱えていく。ここでその名称を確認していくことにする。

34	33	32	31
催判官（崔判官）	小鬼・小卒	住六判官（注禄判官）	管事六卒
冥界	冥界	冥界	冥界



写真5 大理喜洲十隍廟（2015年3月5日、著者撮影）

ただし『黄氏女』テキストでは、名称の途中に歌の調子を整えるための意味をなさない文字（読み）が挿入される場合がある（例えば以下に示す「日月光」であればテキストには「日月合三拉哈光」と記されている（傍線は引用者））。表中では、これら意味をなさない文字を削除して示した。

『黄氏女』テキストでの表記	黄氏女が唱える仏・菩薩・神祇の名称
米陀	規範漢語による仏・菩薩の名称 阿弥陀仏
天官・地官	天官・地官
日月光	日光菩薩・月光菩薩
太請	太清道德天尊
育請	玉清原始天尊
育皇大天軍・育皇大天君	昊天金闕至尊玉皇大帝 ※玉皇大天君の当て字か
福祿受三星	福祿寿三星
南海關士音菩薩・南海觀士音菩薩	南海觀世音菩薩
廟吉祥菩薩	妙吉祥菩薩
須空占菩薩・虛空占菩薩	虛空藏菩薩
菩賢菩薩	普賢菩薩
地占王菩薩	地藏王菩薩
除介占菩薩	除蓋障菩薩
菩救藥王拉菩薩	藥王菩薩 ※普救藥王菩薩の当て字

『黃氏女』テキストの中では黃桂香が経の中で唱えている仏・菩薩や神々の名称は一見、見慣れないものが並ぶものの、実際には中国の仏教・道教の仏・菩薩や神々の名称であつたことが確認できる「馬書田 一九九四」「馬書田一九九六」。

まとめ

以上、白族の民間芸能である大本曲のテキストから、白族の冥界を中心とする他界觀や、仏・菩薩や神祇の名称からみた宗教的世界觀を概観した。以上からわることは、少なくとも民間芸能の内容においては、白族の冥界を中心とした他界觀・宗教的世界觀のほとんどは、中国的宗教的世界觀より大きな影響を受け、実際の彼らの民間に伝えられている宗教的世界觀と一定程度、関連付けられていると考えられる。曲本内に登場する仏・菩薩や神祇も、白族地域の民間や宗教施設でも頻繁にみることができ、少なくとも表面的には周辺の漢族地域の信仰と大きな違いはみられない。ただし、白族の宗教的世界觀における、これら神祇の個別の特徴・意味合いについては、今後の課題としたい。

註

- (1) 民家曲以民家語爲之。聲調不一。音韻悠然動人。亦有演作戲劇者、或雜以漢語。謂之漢僰楚江秋。
- (2) 波羅虎也、毘勇馬也。驃信昔年幸此、曾射野馬并虎
- (3) 倜柔百姓也

- (4) 元和三年、：中略：（異牟尋）子尋閣勸立、或謂夢湊、自稱「驃信」、夷語君也
- (5) [李] 忙靈驚駭打金更鼓集村人
- (6) 早稲田大学附属図書館HPの「古典総合データベース」には、『三世修道黃氏宝卷』など、「黃氏女対金剛經」に関連する内容をもつ宝卷の原本画像が数点紹介されている。（<http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/furyobunko/index.html>）（一〇一六年二月十五日閲覧）またこれら宝卷の解題については、[澤田 一九六三] [澤田校注 一九七一] 参照。

参考文献

日本語（五十音順）

- ・川野明正 二〇〇五年a 『中国の△憑き物△――華南地方の蠱毒（こどく）と呪術的伝承』 風響社
- ・川野明正 二〇〇五年b 『神像呪符「甲馬子」集成――中国雲南省漢族・白族民間信仰誌』 東方出版
- ・北澤菜月 二〇一一年「藤井斉成会有鄰館所蔵「南詔図伝」の概要と諸問題」「奈良時代の仏教美術と東アジアの文化交流」 奈良国立博物館 一一三一―一三二頁
- ・澤田瑞穂 一九六三年『宝卷の研究』 采華書林
- ・澤田瑞穂 一九八六年『中国の庶民文芸』 東方書店
- ・立石謙次 二〇〇三年「南詔国後半期の王権思想の研究――『南詔図伝』の再解釈――」『東洋学報』第八五卷第二号 五一―八五頁
- ・立石謙次 二〇一四年「変わる墓葬――雲南省大理地方を中心にして――」『中国21』 六三―一八六頁
- ・前川 亨 二〇〇三年「中国における『血盆経』類の諸相――中国・日本の『血盆経』信仰に関する比較研究のために――」『東洋文化研究所紀要』一四二号、三四八―三〇二頁、xiii―xiv頁
- ・横山廣子 一九八七年「大理盆地の民族集団」『東洋英和女学院大学 研究紀要』第二六号 三九一―五二頁
- ・横山廣子 一九九一年「白族の本主信仰――地域の守護神の儀礼に見られる漢化と民族の独自性――」『国立民族博物館研究報告別冊』一四号 三八一―四二三頁

中国語（ピンイン順）

- ・侯冲 二〇〇八年『雲南阿吒力教經典研究』中国書籍出版社
- ・大理白族自治州文化局 二〇〇三年『大本曲簡志』雲南出版集團公司 雲南民族出版社
- ・大理市文化局 二〇一〇年『本主文化・大理人的感恩情懷』雲南美術出版社
- ・董團秀 二〇一一年『白族大本曲研究』中国社会科学出版社
- ・李東紅 二〇〇〇年『白族佛教密宗阿叱力教派研究』雲南民族出版社
- ・馬書田 一九九四年『中国仏教諸神』團結出版社
- ・馬書田 一九九六年『中国道教諸神』團結出版社
- ・馬書田 一九九七年『中国民間諸神』團結出版社
- ・馬書田 一九九八年『中国冥界諸神』團結出版社
- ・王鋒 一〇一四年『白語大理方言基礎教程』中央民族大学出版社
- ・徐琳等編著 一九八四年『白語簡志』、民族出版社
- ・楊應新 一九九五年『白文教程』雲南民族出版社
- ・楊育新 二〇〇〇年『大理喜洲風物』雲南美術出版社
- ・雲南省民間文学集成弁公室 一九八六年『白族神話伝説集成』中国民間文芸出版社
- ・張錫祿 一九九九年『大理白族佛教密宗』雲南民族出版社
- ・周祜 二〇〇一年『大理古碑研究』雲南民族出版社

英語

- ・Francis L. K. HSU, *Under the Ancestors' Shadow—Kinship, Personality, and Social Mobility in China—*, California: Stanford University Press, 1971. (初出は、一九四九年)

表1 新白文（大理方言）とIPAとの対応表

声母		韻母		声調*			
新白文	IPA	新白文	IPA	新白文	声調	緊喉	濁音化
b	p	i *	i, ɿ	x	33		○
p	ph	ei	e	p	42	○	
m	m	a	a	t	31		○
f	f	o	o	l	55		
v	v	u	u	f	35		
d	t	e	ɯ	記号なし	44	○	
t	th	v	ɤ	z	32		
n	n	er	eɪ	d	21	○	
l	l	複合母音	iei †	ie	※新白文「z、c、s、ss」に接続する韻母「i」は、[ɿ]と発音される。		
g	k		ia	ia	†漢語の借用語に多くみられる。		
k	kh		iao	iau			
ng	ŋ		io	io			
h	x		iou	iou			
hh	ɣ		ie	iɯ			
j	tç		ui	ui			
q	tçh		uei †	ue			
ni	ɳ		ua	ua			
x	ç		uo	uo			
y	j		ao	au			
z	ts		ou	ou			
c	tsh		ier	ieɪ			
s	s		uer	ueɪ			
ss	z						

※新白文「z、c、s、ss」に接続する韻母「i」は、[ɿ]と発音される。
†漢語の借用語に多くみられる。

*新白文の声調は韻母の後ろに付す。

中国の研究者の論著には、独自のIPAの用法がみられ、また研究者によって音韻の分類方法は異なる。本書では〔徐琳等編著 1984：116-127・113-136〕〔楊応新等編写 1995：7-24〕〔王峰編著 2014：21-35〕をもとに作成。